２００４年　7月　1日

２００４年度・公式規則変更内容・決定報

（全９頁）

日本アメリカンフットボール協会
競技規則委員会

アメリカンフットボール公式規則を以下のように変更します。この公式規則変更は２００４年秋季公式戦より適用します。
２００４年度・公式規則変更内容の全文は、下記の通りです。記載は、次の規則に従っています。

① 「篇－章－条」の後の（新規）、（変更）、（追加）、（削除）、（移項）、（移動）等は（　　）内の事項が行われた事を示し、それに続く規則文は新変更文である。

② 下線部は、部分的な変更、追加が行われた場合にその部分を示す。削除に関しては削除部分に対し削除された部分を≪　≫で囲み、削除の二重線を引いてある。

③ 【注：……】はこの変更部分に関する競技規則委員会の注意書きである。

④ 新規の条文の発生、および削除に連動した既存の「篇－章－条」の番号の変更に関する部分は、原則として、この変更文に載せていない。

⑤ 規則変更の中で主要な事項に関しては、従来の規則と変更規則を対比させ解説を加えてある。解説部分は、変更規則文の直後に記述し、その部分を枠で囲ってある。

1-2-7-a　（追加）　ヤードチェーンが使用される場合、ヤードチェーンは、高さ５フィート（１．５２m）以上の２本の棒につなぎ、チェーンを完全に伸ばした時の２本の棒の内側の長さは、正確に１０ヤード（９．１４m）でなければならない。
両チームが合意した場合は、シリーズ獲得線を正確に計測できる他の形式のシリーズ獲得線標示器を記者席と反対側のサイドラインの外側で使用することができる。
試合前に、ラインズマンは、すべてのシリーズ獲得線標示器が正確で使用に耐えうることを検査し、承認しなければならない。

1-2-7-b　（追加）　ダウン標示器は、記者席と反対側のサイドラインの外側約６フィート（１．８３m）で使用される高さ５フィート（１．５２m）以上の棒の上に取り付けられなければならない。

1-2-9　タイトル　（変更）　フィールド領域　【注：タイトルのみの変更】

1-2-9-a-罰則　（変更）　ライブボール中の反則。プレビアス・スポットから５ヤード［Ｓ２７］

1-3-1-i　（追加）　ボールを規格外に変形させてはならない。これには、ボールを乾燥させる物質の使用も含まれる。ボール乾燥機器類はサイドライン付近、およびチームエリアで使用

してはならない。

1-4-5-m　（追加）　相手のジャージーの色と類似した、または１－４－５－ｂを満たさないグローブ、手のパッド。グローブとは、手をぴったりと覆うもので、それぞれの指の部分が分離されており、それぞれの指を完全に覆っているもので、かつ指と指のあいだを連結させる余分なものがついていないものをいう。

（１）グローブの規定

☆従来、グローブのそれぞれの指の部分は分離されている必要があった。
★本年より、従来の規定に加えて、指と指との間を連結させる余分な物をつけることが禁止された。この規定に反した場合は、不正な装具の違反である。

1-4-5-o　（変更）　ユニフォームへの付着物。（例外：（１）攻撃側の１名のインテリア・ラインマンが付けた１枚の水分を吸収する無地の白いタオル。他のプレーヤーがベルトの前面および側面の位置に付けた４インチ×１２インチ（１０ｃｍ×３０ｃｍ）の１人につき１枚の水分を吸収する無地の白いタオル。（２）寒い天候の場合のハンド・ウォーマ）

1-4-9-a　（追加）　試合中は、コーチングおよび判定を目的として、サイドライン、記者席、プレー場内の他の場所で、テレビの再生装置およびモニター設備を禁止する。節と節との間を含めて、試合中はいつでも、コーチングを目的とした映画、あらゆる種類のフィルム、ファクシミリ機器、ビデオテープ、写真、文書（絵図を含む）伝送機器、およびコンピュータの使用を禁止する。

1-4-9-b　（削除）　~~≪節と節との間を含めて、試合中はいつでも、コーチングを目的とした、映画、あらゆる種類のフィルム、ファクシミリ機器、ビデオテープ、写真、文書（絵図を含む）伝送機器、およびコンピュータの使用を禁止する。~~≫記者席とチームエリアの間を結ぶ音声での伝達手段のみの使用が許可される。このような伝達手段の発信元は競技団体が定める場所とし、定めがない場合には両２５ヤードラインをスタジアムの最上段まで延長した範囲内のスタンドからとする。コーチングを目的とした他の伝達手段は、どこであっても許可されない。

1-4-9-c　（変更）　カメラ、音声装置、マイクロフォンなどのメディアの伝達装置を、フィールド、チームエリアおよびそれらの上空で使用することを禁止する。
例外
１．ゴールポストの柱とクロスバーの後方の支柱に取り付けられたカメラ機材
２．チームエリアの上空に張られたケーブルに取り付けられた音声装置のないカメラ

3-1-3-h　（変更）　タイムアウト　両チームは、各超過節に１回ずつのタイムアウトが認められる。第４節までに使用しなかったタイムアウトは、超過節には持ち越せない。各超過節で使用しなかったタイムアウトは、次の超過節に持ち越せない。超過節と超過節の間

に取られたタイムアウトは、次の超過節のタイムアウトとみなされる。ラジオおよびテレビ・タイムアウトは、それぞれの超過節の間（第１と第２超過節の間、第２と第３超過節の間、等）に認められる。ラジオおよびテレビ・タイムアウトのためにチーム･タイムアウトの長さを延ばすことは認められない。超過節は、ボールが最初にスナップされた時に始まる。

3-2-4-a　（追加）　競技時間は、ラインジャッジ、バックジャッジ、フィールドジャッジ、またはサイドジャッジが操作するストップ・ウオッチか、特定の審判員の指揮下にある助手が操作するゲーム・クロックのどちらかの計時装置によって計時される。ゲーム・クロックの形式は、試合主催者が決定する。

3-3-4　（追加）　タイムアウトを使い果たしていない場合、いずれかのプレーヤーあるいはヘッドコーチからボールがデッドの時に要求があれば、審判員はチーム・タイムアウトを許可し、そのチームに課す。

3-3-4-d　（新規）　チームエリアまたはコーチングボックスかその近くにいるヘッドコーチは、ボールデッドが宣告された後からスナップ前までならば、チーム・タイムアウトを要求することができる。

（２）チーム・タイムアウトの要求者

☆従来、チーム・タイムアウトは前のダウンに参加していたプレーヤーかあるいは両９ヤードマークの間にいる正当な交代選手のみが要求できた。
★本年より、従来の規定に加えて、ヘッドコーチも要求できることになった。

3-3-4-e　（追加）　コーチが公式規則が間違って施行されていると思った場合、プレーヤー、入ってくる交代選手またはヘッドコーチは、レフリーとヘッドコーチとの協議を要求することができる。（以下、省略）　【注：旧3-3-4-d　を　3-3-4-e　として、かつ（追加）】

3-3-7-a　（追加）　プレーヤーまたはヘッドコーチにより要求されたチーム・タイムアウトは、１分３０秒を超えてはならない。（以下、省略）

3-5-2-e　（変更）　交代や交代を装う過程において、明らかに守備側に不利益をもたらそうとＡチームはスクリメージ・ラインに急いでつきボールをスナップしてはならない。レディ・フォー・プレーの後にこれらの行為があれば、審判員はＢチームの交代選手が位置につき、被交代選手がフィールド・オブ・プレーから出るまでボールをスナップさせてはならない。Ｂチームは、迅速に交代しなければならない。
罰則（１回目）：デッドボール中の反則。Ｂチームが迅速に交代しなかった場合は、ゲームの遅延の反則。またはＡチームに２５秒を経過したゲームの遅延の反則。サクシーディング･スポットから５ヤード［Ｓ７およびＳ２１］。レフリーはヘッドコーチに、以降の同一の行為はスポーツマンらしからぬ行為として罰則を科すことを伝える。

罰則（２回目以降）：デッドボール中の反則。審判員は、直ちにホイッスルを吹く。
サクシーディング・スポットから１５ヤード。［Ｓ７およびＳ２７］

（３）相手に不利益を与える攻撃側の不正な交代

☆従来、交代や交代を装う過程において、明らかに守備側に不利益をもたらそうとする攻撃側の行為は、ボールがスナップされた時点で反則として成立した。
★本年より、攻撃側がこのような行為をすれば、審判員は、守備側の対応が十分に行われるまでボールのスナップを止めることになった。その結果、攻撃側のゲームの遅延の反則となる場合もあり、守備側の対応が迅速でない場合は、守備側のゲームの遅延の反則となる。

4-1-4-罰則　（変更）　罰則：デッドボール中の反則。サクシーディング・スポットから５ヤード。［Ｓ７およびＳ２１］

6-1-2-a　（変更）　プレースキック時のホルダーとキッカーを除くＡチームの全プレーヤーは、ボールの後方にいなければならない。
罰則：ライブボール中の反則。プレビアス・スポットから５ヤード、またはＢチームのラン後にＢチームに所属するボールデッドの地点、またはタッチバックによりボールが置かれた地点から５ヤード。［Ｓ１９］　【注：旧6-1-2-b　を　6-1-2-a として、かつ（変更）】

（４）フリーキック時のエンクローチメントの罰則の施行

☆従来、フリーキック時のキック側のエンクローチメントは、プレビアス･スポットから５ヤードの罰則であり、罰則の適用後、再キックであった。
★本年より、従来の罰則に加え、ダウン終了後にレシーブ側のランエンドの地点から５ヤードの罰則が追加され、レシーブ側が何れかの罰則を選択するか、罰則を辞退することができることとなった。

6-1-2-b　（移動）　両チームの全プレーヤーはインバウンズにいなければならない。［Ｓ１８またはＳ１９］　【注：旧　6-1-2-a　の移動】

6-1-2-d　（追加）　セフティーの後でパントまたはドロップキックを行う場合は、キックチームの制限線の後方でキックしなければならない。ライブボール中の反則に対する距離罰則がプレビアス・スポットから施行される場合は、キック側の制限線が前の罰則によって移動されていない限り、罰則施行は２０ヤードラインからである。

6-2-1　（変更）　フリーキックが、Ｂチームのインバウンズのプレーヤーによってタッチされずに、ゴールライン間でアウト・オブ・バウンズになれば反則である。

6-4-1-a　（削除）　~~≪キックチームのプレーヤーは、フリーキックやスクリメージ・キックをキャッチする位置にいるレシーブチームのプレーヤーの２ヤード以内にいてはならない。（Ａ．Ｒ．６－４－１－Ⅰ、Ⅲ、ⅥおよびⅦ）　この２ヤードの制限を犯したプレーヤーは、ランナーに対してタックルすることはできるが、パーソナル・ファウルとなる接触をしてはならない。≫~~
【注：旧6-4-1-b　を　6-4-1-a　へ】

6-4-1-b　（変更）　レシーバーとなる可能性のあるプレーヤーへの妨害が、相手によるブロックの結果によるものであれば、この妨害は反則ではない。【注：旧6-4-1-c　を　6-4-1-b　へ】

6-4-1-c　（変更）　キックチームのプレーヤーは、レシーバーとなる可能性のあるプレーヤーがボールにタッチする前かタッチと同時に、そのレシーバーに接触した場合、妨害の反則である。（Ａ．Ｒ．６－４－１－Ⅱ、Ⅲ、ⅦおよびⅨ）　疑わしい場合は、妨害の反則である。【注：旧6-4-1-e　を　6-4-1-c　へ 】

6-4-1-d　（削除）　~~≪相手のブロックによりキックチームのプレーヤーがレシーバーの２ヤード以内に入った場合は、反則ではない。≫~~

6-4-1-罰則　（変更）　ゴールライン間の反則：妨害の反則に対して、反則則地点から１５ヤード、およびレシーブチームのボールで第１ダウン。［Ｓ３３］
ゴールライン後方での反則：タッチバックが与えられ、サクシーディング・スポットから罰則を科す。
ひどい反則者は資格没収。［Ｓ４７］

（５）キックのレシーバーを中心とする２ヤードのバッファゾーン

☆従来、キック側のプレーヤーは、フリーキックやスクリメージ・キックをキャッチする位置にいるレシーバーの２ヤード以内に入ってはならなかった。
★本年より、この規定は廃止され２ヤード以内に入っても反則とはならなくなった。しかし、キックをキャッチする機会の保護は従来どおりであり、キック側のプレーヤーはキックをキャッチしようとするレシーバーをいかなる方法でも妨害してはならない。

7-2-2-a　（削除）　~~≪空中で≫~~キャッチされた場合、ボールはプレー中のままである。（以下、省略）

7-3-2-f　（変更）　ロスをのがれるためＡチームの有資格プレーヤーがパスをキャッチする機会が全くない区域に向かってフォワード・パスを投げた場合。疑わしい場合は、Ａチームのプレーヤーはパスをキャッチする機会があったとする。［Ｓ３６およびＳ９］
例外
１．スナップ時のボールの位置からサイドラインの方向に５ヤード以上離れているパサーが、ヤードのロスをのがれるためにニュートラル・ゾーンを越えたインバウンズ、またはニュートラル･ゾーンを越えたアウト・オブ・バウンズに落ち

るボールを投げた場合、反則とはならない。

２．スナップ時のボールの位置からサイドラインの方向に５ヤード以上離れているパサーが、ヤードのロスをのがれるためにニュートラル・ゾーンを越えた地点のプレーヤー、審判員、またはその他のものにタッチするボールを投げた場合、反則とはならない。

罰則：反則地点でロス・オブ・ダウン。［Ｓ３６およびＳ９］

7-3-7-a　（追加）　フォワード・パスがグラウンドに当たった場合、または規則よりアウト・オブ・バウンズとなった場合は、パス不成功である。また、プレーヤーが足を地面から離してパスをキャッチした場合、フィールド・オブ・プレーまたはエンドゾーンですでに前進が止まっていたときを除き、境界線上またはその外側に最初に着地すれば、パス不成功である。

7-3-8-c-4　（新規）　スクリメージ・キック・フォーメーションにおいてＡチームのキッカーとなる可能性があるプレーヤーが、キックを装ってボールを高く遠方に投げ、その後、Ｂチームのプレーヤーによる接触があった場合。

（６）パントに見せかけたフォワード・パス

☆従来、パントに見せかけて攻撃側がパスをした場合、守備側の妨害があればパス・インターフェランスの反則が適用された。

★本年より、パントに見せかけてキッカー（パサー）がボールを「高く、遠く」に投げた場合は、守備側のパス・インターフェランスの反則は適用されなくなった。

7-3-10-例外-1　（変更）　スナップ後、Ａチームの無資格レシーバーが直ちにチャージし、ニュートラル・ゾーンを越えて１ヤード以内で相手と接触し、接触の継続がニュートラル・ゾーンを越えて３ヤード以下の場合。

8-3-3-b-2　（追加）　Ｂチームに対する罰則の施行後の再プレーのときのボールの位置は、インバウンズ・ライン上またはその間ならば施行後のヤードライン上またはその後方のどの位置でもよい。

8-5-1-a　（追加）　不成功となったフォワード・パスの場合を除きボールがゴールラインを越えてアウト・オブ・バウンズとなった場合、あるいはボールがゴールライン上、その上空、または後方でそのエンドゾーンを守っているチームのプレーヤーの確保下でデッドとなった場合（または規則によりデッドとなった場合）で、このボールのゴールラインを越えさせた責任が、そのエンドゾーンを守っているチームにあったとき。

8-5-1-例外3　（新規）　チーム確保の変更後、Ａチームの５ヤードラインとゴールラインの間で、Ａチームが相手の不正なフォワード・パスをインターセプトし、あるいはファンブルまたはバックワード・パスをインターセプトまたはリカバーし、ランナーの最初の勢いでランナーがエンドゾーンに入り、Ａチームがボールを確保したままボールデッドとなった場合。この場合、ボールは、不正なフォワード・パスやファンブルまたはバックワード･パスをインターセプトやリカバーした地点でＡチームに所属する。

8-7-2-a　（追加）　キック、パス、スナップ、またはファンブルしたプレーヤーによって与えられた原動力とは、たとえグラウンドや審判員、あるいはいずれかのチームのプレーヤーに当たってボールの方向が変化したとしても、そのボールのいかなる進行方向にも責任を負うものである。

9-1-2-e-2　（追加）　バックスは、スナップ時に通常のタックル（スナッパーから２人目のプレーヤー）の身体のフレームより完全に自己の身体のフレームが外側に位置するかまたはモーションしている場合、ニュートラル・ゾーンの手前からニュートラル・ゾーンを越えて１０ヤードまでの間では、スナップ時のボールの方向に対して腰より下のブロックをしてはならない。身体のフレームは、横方向に伸ばした腕や足を含まない。

9-1-2-o　（追加）　守備側のプレーヤーは、明らかにボールが投げられた後は、パサーに突き当たったり、パサーをグラウンドに投げつけてはならない。これは、ラフィング・ザ・パサーであり、最後のランエンドがニュートラル・ゾーンを越え、かつ、そのダウン中にボールのチーム確保の変更がない場合、罰則は最後のランエンドから施行する。（例外：Ａチームのプレーヤーによってブロックされた守備側のプレーヤーが、パサーとの接触を避ける機会がなかった場合。しかし、９－１－２－ａで定められているパーソナル・ファウルに対する守備側のプレーヤーの義務は遵守しなければならない。）

（７）ブロックされてパサーに当たったプレー

☆従来、守備側のプレーヤーがパサーに当たった場合、どのような経緯でパサーに当たったかに関わらずラフィング・ザ・パサーの反則であった。
★本年より、攻撃側のプレーヤーの力が働いて守備側のプレーヤーがパサーに当たった場合は、ラフィング・ザ・パサーの反則とはならなくなった。

9-1-2-q　（追加）　守備側のプレーヤーは、自己のチームに有利なように相手プレーヤーを踏みつけたり、飛び乗ったりしてはならない。明らかにフィールドゴールやトライをブロックしようとしてニュートラル・ゾーンの前方から走ってきて飛び上がった守備側のプレーヤーは、相手の上に降りてはならない。

（８）フィールドゴール時の守備側のジャンプ

☆従来、フィールドゴールやトライ時に守備側のプレーヤーがニュートラル・ゾーンを飛び越え相手の上に降りた場合、反則ではなかった。
★本年より、フィールドゴールやトライをブロックする意図が明らかで、守備側がニュートラル・ゾーンの手前から攻撃側に向かって走り飛び越えた場合、相手の上に降りたり、 踏めばパーソナル・ファウルの反則となる。

9-2-1-a-1　（追加）　プレーヤー、交代選手、コーチ、正式な関係者、および公式規則の適用を受ける者

は、口汚い、脅迫的な、またはみだらな言葉を使用したり動作を行ってはならない。また、敵意を催したり、相手や審判員、または試合のイメージの品格を汚す、そのような言動を行ってはならない。次の行為は禁止される。

9-2-1-a-1-（a）　（追加）　相手を指さし、または手、腕を使用し挑発すること、およびボールを突きつけること、または喉を切る動作をすること。

9-2-1-a-1-（b）　（追加）　相手をなじったり、ひやかしたり、もしくはあざけったりすること。

9-2-1-a-1-（e）　（追加）　独走中のランナーが、相手のゴールラインに近づいたときに明らかに歩幅を変えること、または相手がいないのにエンドゾーンにダイビングすること。

9-2-1-a-2-（a）　（追加）　審判員が取りに行かなければならない距離へ、ボールを蹴ったり、投げたり、回転させたり、または持っていくこと（ボールをフィールドの外へ持ち出すことも含む）。

10-2-2-e　例外5（新規）　フリーキック時のＡチームのエンクローチメントは、プレビアス・スポットから５ヤード、またはＢチームのラン後にＢチームに所属したボールデッドの地点から５ヤード。

11-2-1-d　（追加）　レフリーは、罰則の適用の責任者として、両チームのキャプテンに罰則の施行の手順と結果を説明しなければならない。レフリーは、アンパイヤの罰則施行を確認する。レフリーは、マイクロフォンを装着している場合、反則をしたプレーヤーの番号をアナウンスすることが望ましい。

（９）レフリーによる反則者の番号のアナウンス

☆従来、反則の発生時にレフリーがアナウンスする場合、反則者の番号のアナウンスに関しては定めていなかった。
★本年より、レフリーがマイクロフォンを装着している場合、反則したプレーヤーの番号をアナウンスすることが望ましいとなった。

11-4-1-a　（変更）　ラインズマンは、シリーズ獲得線標示器とダウン標示器の運用に関して責任を有する。記者席の反対側のサイドラインの外側でシリーズ獲得線標示器を担当する最低２名と、ダウン標示器を操作する１名のクルーに対して指示をしなければならない。ダウン標示器は、ボールの先端に位置していなければならない。

11-7-1-a　（変更）　サイドジャッジは、試合時間の計時と、フィールド上の自己の区域の有資格レシーバー、キック、およびパスに対して責任を有する。

11-8-1-a　（変更）　バックジャッジは、守備側のプレーヤーの人数、２５秒の計時、ロングパスやキックにおける判定、および自己の区域におけるボールの状況に関し責任を有する。

【以下は、公式規則解説書の新規追加項目である。】

６－１－２－Ⅴ

Ａチームはフリーキックでエンクローチメントを犯し、Ｂ２７が膝をグラウンドにタッチしキックをリカバーした。判定：Ａチームのエンクローチメントの反則。ボールはリカバーの地点でデッドとなる。罰則－プレビアス・スポットから５ヤードの罰則を科し再度キックオフを行うか、デッドボールの地点から５ヤードの罰則を科し第１ダウン、１０ヤードの攻撃を行うか、Ｂチームが選択する。Ｂチームのリカバーは、ランニングプレーの開始だったが、直ちにデッドとなった。この適用例は、Ｂ２７がフェヤーキャッチを行っても同様である。

６－１－２－Ⅵ

Ａチームはフリーキックでエンクローチメントを犯し、Ｂ２７がキックされたボールを持って走り返している時にファンブルをした。そのボールをＢ４５がリカバーしたが、膝がグラウンドにタッチしていた。　判定：Ａチームのエンクローチメントの反則。ボールはリカバーの地点でデッドとなる。罰則－プレビアス・スポットから５ヤードの罰則を科し再度キックオフを行うか、Ｂ４５のリカバーの地点から５ヤードの罰則を科し第１ダウン、１０ヤードの攻撃を行うか、Ｂチームが選択する。

６－４－１－Ⅹ

５０ヤードラインでＡチームの第４ダウン、１０ヤード。Ａチームの風に吹かれたスクリメージ・キックがＢチームの３０ヤードラインに向かって降下していた。２０ヤードラインにいたＢ１８が、３０ヤードラインでキャッチするために２５ヤードラインにいたＡ９２を迂回しなければならなかった。　判定：キックをキャッチする機会の妨害のＡチームの反則。罰則－反則地点である２５ヤードラインから１５ヤード。

９－１－２－ⅩⅩⅦ

パサーＡ９がボールを離した時から１歩進んだＢ７３が、勢いでＡ９に当たった。　判定：反則ではない。Ａ９がボールを離した後の守備側の最初の１歩に限り、Ｂ７３がパサーに直接接触してもよい。２歩以上進んだ場合の接触で反則とならないためには、Ｂ７３は、接触を避ける努力をするか、あるいは力を緩めなければならない。Ｂ７３がブロックされた結果Ａ９に接触した場合は、反則ではない。しかし、この場合でも、ヘルメットとヘルメットの接触や９－１－２－ａに挙げられている他の反則があれば、Ｂ７３の責任となる。

９－１－２－ⅩⅩⅧ

パサーＡ１７がボールを離した後、Ｂ６８が２歩進み、接触を避けようとは見えずにＡ１７に突っ込んだ。　判定：ラフィング・ザ・パサー。パサーは無防備であり、負傷の危険が高いので、十分に保護されなければならない。Ｂ６８は、２歩動いた後では、Ａ１７がボールを離したことに気がついているはずであり、パサーへの接触を避けることができたはずである。

以　上